

# 野ばら 9月号



## 神様がいたら

校長 夏見隆晴

六年間の中・高生活も最終学年となり、進学先を決定しなければならぬ時期を迎えると、私立学校に学んだ者も将来の道を決定し、クラスの友人間で、誰がどこの大学に挑戦しているということも、だいたい知られてしまいます。わたしも、私立の中高一貫校で学びましたので、「あいつはちょっと変わった大学を受けるようだ」という、自分への噂が流れているのが、わたしの耳にも入りました。その他の志望大学名と共にでしたが。

問題は「変わった大学」というところにありました。「変わった」というのは、その大学が東京のキリスト教系の大学であったということでした。わたしの育った市は古い城下町で、宗教と言えば空海の真言宗のことで、四国八十八か所巡りのお遍路さんへのお接待が盛んに行われていました。わたしの家も、その例に漏れるということはありませんでした。そんなわたしが、キリスト教の大学を受けるのかというのが、クラスの結構な話題となったのでしょうか。ただ将来の事を考え、他の大学も数校受けると公言もしていました。

それでも、唯一の神を信じるキリスト教となると、皆から特異な目で見られ、何故そんな良く解らない、変わった大学に行くのかと、問われたことは、今も憶えております。でも、わたしは他の道を捨てて、結局は、東京のカトリックの大学に進学いたしました。勿論、その年も四国の高校から入学した学生は、数えられるほどしかいませんでした。でも、わたしにとっては、最高の大学でした。生涯、教をを請うことになる先生方と出会うことが出来たのです。その先生方も、今はほとんど亡くなられ、お礼を言う事も出来なくなってしまいました。お教えいただいた事は、未だにわたしの脳裏を離れません。

また大学卒業後も、お陰さまでカトリック学校で働けるというお恵みを頂き、自分がいかに神様から呼びかけを受け、神様のお仕事に微力ながらお手伝いさせて頂けると、願ってもない恵みを得ることが出来たという実感を、今も噛みしめながら、日々を生きております。わたしの生涯は、神様の教をを若い人たちに伝えることにあったようです。

ただ、神様はわたしを、神様のなさり方で、使ってくださっているように思います。中学高校時代に、わたしの話を聞かされた生徒たちは、神様の事を理解してくれたとは言えません。彼らは「先生の話は、社会に出て働くようになって、始めて実感を持って解るようになりました」と話してくれます。わたしは、聖書にあるように、ただ、「若い人たち」という畑に「種を播いた」だけであったのです。育ててくださったのは、神様です。

神様がいたから、わたしは「種まき」のお手伝いが出来たのです。わたしは、神様が呼んでくださったから、若者の教育という、お手伝いのできたのです。神様がいらっしゃる事を信じられない人も、神様に対して祈る、人の「祈り」だけは信じると言うくらいです。

# Quality

(日本語訳を裏面右下に掲載します。)

Harry Winfield

“I think you should visit your sister. She is in the hospital and it doesn't look good. ”

Reading these words in an email from my mother, my family decided that I should go back to Hawaii for a visit. My sister was very ill and was in the hospital. I noticed something that I have rarely seen in the hospitals I have visited in Japan, the doctors, nurses and other medical staff members were asking my sister about her care. The questions they were asking were not only about her physical condition at the moment, but also about her mental well-being and how she wanted to be treated. They seemed to be treating my sister as a member of their family not just a patient with cancer. I asked why this hospital took this approach to patient treatment. They said that the patients in this hospital have curable diseases specific to the individual, so curing the patient is more important than treating the disease.

They also knew that I was visiting from Japan, and asked me about Dr. Hinohara of St. Luke's Hospital in Tokyo, who was a pioneer in this course of patient care. I did not know too much about him, but I felt that I had to learn more about the man who did so much to help my sister to leave the hospital with hope for the future.

Shigeaki Hinohara was born in Yamaguchi Prefecture on October 4, 1911 and passed away on July 18, 2017. He lived to be 105 years old. He led a very active life. He graduated from the school of medicine at Kyoto Imperial University. He continued studying at the university and then in 1942 he started working at St. Luke's in Tokyo as a physician and teaching at St. Luke's College of Nursing where he would remain on staff for the rest of his life.

Then, in 1970 Dr. Hinohara had a life altering experience. He was held captive along with other passengers on a Japan Airlines airplane. He spent 4 long day in over 30 degree heat. The plane was hijacked by the Japanese Communist League-Red Army Faction. Because of this experience his view of life dramatically changed and he decided to dedicate his life to helping others. For the next 47 years he did just that, helping people of all ages to live better lives by writing children's books, expanding the use of art and animal therapy for patients, writing guides to life, and even creating a new association for the elderly.

To sum up, Dr. Shigeaki Hinohara was a very special man who valued the quality of every human life. He has said that science alone can't cure people. “Science lumps us all together, but illness is individual. Each person is unique, and diseases are connected to their hearts. To know the illness and help people, we need to know liberal and visual arts.” In dedicating his life to improving the quality of life for others, I am sure that received so much joy day after day. Let's try to be like Dr. Hinohara and work to help others improve the quality of their lives. I know I plan to listen more to a person and consider more thoroughly their condition before I offer suggestions of improvement. By giving others the tools for improving the quality of their lives, mine will improve a thousand fold.



# 生徒の頑張り



## ★MAKE A WISH Japan 街頭募金活動

2017年7月21日(金)にパレットくもじ前広場及び交差点歩道付近にて本校中1～高3の約130人による街頭募金活動が行われました。暑い中、元気な声で呼びかけた結果、164,231 円の金額が集まりました。活動に参加したみなさん、ご協力ありがとうございました。

## ★平成29年度九州中学校体育大会 第50回九州中学校体操競技大会

中1 中山 盛榎 器械体操 個人総合  
中1 中田 健斗 器械体操 個人総合



## ★平成29年度中頭地区ストーリーテリングコンテスト

中2 宮平 清香 出場 ストーリータイトル：“Oh No!”

## ★2017 APU(立命館 Asia Pacific University)サマースクール ～世界と混ざる高校の夏～

高1 川又スティーヴン由雅 参加

## ★南東北総体2017

平成29年度全国高等学校総合体育大会 秩父宮賜杯  
第70回全国高等学校陸上競技対校選手権大会

高1 藤原 孝史朗 出場 砲丸投げ 記録 14m34 自己新記録  
円盤投げ 記録 39m10 自己新記録  
高1 中田 海斗 出場 体操競技

## ★第72回九州陸上競技選手権大会 兼 第102回日本陸上競技選手権大会予選

高1 藤原 孝史朗 第2位 男子ジュニア砲丸投げ6kg 14m98 自己新記録

## ★第19回全沖縄高等学校英語スキットコンテスト

高2 當山 礼恵 アン  
高2 大城 アリナ 姫花 予選突破・決勝進出

## ★平成29年度ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室～

高2 高山 七海・當山 礼恵 アン・松田千秋 計3名参加

## ★ハンセン病に関する親と子のシンポジウム

高2 渡久地 礼李 パネリストとして参加

題：「全ての人々が堂々と生きられる社会の実現に向けて」

## ★第35回「はごろもチャレンジ隊！」 主催：宜野湾市社会福祉協議会

高2 高山七海・平川真生乃・奥平南蘭・矢幡世里菜・外間栄美・松田千穂 計5名参加  
高3 ウィンフィールド ジェイミー レイラニ・小川聡子 計8名参加



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん

## ★平成29年度「英語でお仕事プログラム」 主催：沖縄県教育委員会 共催：沖縄科学技術大学院大学 OIST

高3 マアトバング ハニエル  
高3 大城 沙耶香 計2名参加



## 9月の行事

9月1日(金)	生徒集会・授業開始
2日(土)	English Festival(9:00～講堂にて) 高3 希望者 基礎・小論(放課後)
6日(水)	職員会議 16:20 完全下校
16日(土)	総合(平和学習) 中2 修学旅行説明会
18日(月)	敬老の日
20日(水)	高1・2 進研総合学テ② 高3 ベネッセ駿台模試①
21日(木)	地区陸上
23日(土)	秋分の日
27日(水)	委員会活動
28日(木)	総合(体験学習)
29日(金)	終業式 生徒会レク(午前中)

### 質

ウィンフィールド ハリー

私の妹は、数年前から癌を患っている。先月(8月)月上旬にハワイにいる両親から戻ってきて欲しいと連絡があった時は、戸惑いながらもハワイに2週間戻ることにした。

妹が入院している病院でのケアは、病気を診るだけではなく、精神的なサポートを施していて、スタッフは、妹をまるで自分の家族のようにケアしてくれていた。そういうケアの仕方は、どこから来るのかを聞いてみたら、先日お亡くなりになった国際聖路加病院の日野原重明先生が呈していた『『キリスト教の愛の心』は、患者さんの視点・価値観を重視することであり、診療現場において、職員一人ひとりが「病める人々のために身も心も寄り添うような医療」を提供すること。」という質の高い医療を目指していることを基本としているようだ。

日野原重明氏は、1911年10月4日山口県に生まれ、今年7月18日にお亡くなりになった。105歳であった。お亡くなりになるまで医療及び社会的活動を全うされた。

1970年には、日本赤軍による「よど号ハイジャック事件」に遭遇し、30度以上の高温の中を4日間拘束された経験がある。その経験を機に人生の転換期を迎え、47年間、人の為に生きることを決めて子ども達のために絵本を作ったり、動物セラピーの普及に努めたり、生き方を広める為の多くの本を書き、生き方を考える「新老人の会」も結成した。

日野原先生は、「医療・科学だけでは、人を治療することはできない」とおっしゃっていて、1人1人の命が大事で、心に触れることが大事だということを提唱されていた。日野原先生からは、1人1人の個性に気づき、心情に触れ、できることを提案していくことが大事だということを教えていただいた気がする。日野原先生は、人のために自分自身の人生を貢献することで、豊かな人生を送ることができ、また周りの人を幸せにしてきたのだと思う。日野原先生のように人のために労を尽くすことで豊かな人生を送ることができるようにしていこう。